

# 「家族の劇」として『アナトールの墓』を読む

馬 越 洋 平

Reading *A Tomb of Anatole* as a family drama

Yohei UMAKOSHI

## Abstract

*A Tomb of Anatole* is an unfinished text, though it was aimed at becoming a poetic work. The characteristic that can be deduced from this text is that it was going to be written as a most typical “family drama” in the life of Mallarmé. Clarifying the role of Mallarmé’s family in Anatole’s death and its impact on the relationships in the family is the aim of this study. I would like to explore this problem over three chapters.

In Chapter 1 (Tragedy of the couple), I discuss the problem where the difference of the reaction to the son’s death caused discord between the father and the mother. The couple fell into discord, because Marie couldn’t share Mallarmé’s attitude for accepting the death of their child and changing it into a literary work. Mallarmé hopes to be reunited with his wife, by <tears>, <earth>, <monism>.

In Chapter 2 (Death of the heir), I consider what Anatole’s death means for Mallarmé who is a poet. The study showed that Anatole is the person dreamed of as an owner of a poetic spirit for Mallarmé and his death means losing an understanding person of poetry in the family. Having lost the person to whom he should hand down a mystery of the poetry, Mallarmé tried to sublime this text as a drama of the heir’s death” linked to *Igitur*.

In Chapter 3 (Future left), Mallarmé’s daughter Geneviève is entrusted with the responsibility of uniting her parents and brother after their death. Fortunately, this mission was accomplished by Geneviève.

## はじめに

マラルメが八歳で亡くなった息子アナトールのために書いた覚書は、ジャン＝ピエール・リシャルによってまとめられ『アナトールの墓』（覚書）と題され、大きな序文がつけられて出版された（一九六一年）。『アナトールの墓』は、アナトールの死を乗り越えるために、マラルメが思考によって、息子の精神を作品のなかに永遠化しようとして取られたメモである。当然そこには、父であるマラルメが、モノローグを中心とした語り手として登場するのだが、マラルメはこの悲劇を唯一人で演じていたわけではない。この覚書には、「父」、「母」、「息子」、「娘」などのマラルメの家族全員が登場するのである。

『アナトールの墓』とは、アナトールの死に際してマラルメ自身によって、マラルメの「家族」がそれぞれいかなる存在であるかが語られている場であり、息子の死によってマラルメの一家の関係性が大きく変容していくことが描かれているテキストなのである。本稿では、『アナトールの墓』の「家族の劇」という性質に注目しこのテキストを読み解き、アナトールの死のなかで、マラルメの「家族」にそれぞれいかなる役割が与えられているのか、またアナトールの死によって、その「家族」の関係性がどのように変化してゆくのかを明らかにしたい。

本稿ではそのために、三つのテーマを立てたい。最初に考察するのは、マラルメ夫婦の関係がアナトールの

死によってどのように変化してゆくかである。特に、息子の死によって夫婦関係が危機に陥ってしまうことに注目したい。次に、そもそも息子アナートルとは、マラルメにとっていかなる存在であったのか、そしてその喪失がマラルメにとって何を意味しているのかを分析する。最後に、残された娘ジュヌヴィエーヴに、アナートルの死のなかでどのような使命が託されているのかを明らかにしたい。

## 第一章 夫婦の悲劇 父マラルメと母マリー

\*

『アナートルの墓』は、マラルメだけでなく、他の家族とともに、アナートルの死という悲劇を乗り越えようとして書かれたものなのである。それは例えば、紙片 19<sup>(1)</sup>の「私たちのための慰め *consolations pour nous*」という言葉が示す通り、このテキストがマラルメのためだけの「慰め」ではなく、残された他の家族の「慰め」にもなるように書かれたものだったことから分かる。そしてここで言う「私たち *nous*」というのは、とりわけこの作品の主要登場人物である父と母のことを表していることは間違いない。『アナートルの墓』とは、夫婦の喪を語ったテキストなのである。

したがって、父と母が、子供の死という悲劇のなかで、いかなる役割が与えられ、その関係性がいかに変化してゆくかを明らかにすることは、『アナートルの墓』のドラマを読み解くには、必要不可欠なことなのである。その内容を予告しておく、この劇は、マラルメ夫妻が、息子の死への反応をめぐって「分断」の危機に陥ってしまうが、これを再び「統合」しようとするかたちで、展開されてゆくのである。それでは『アナートルの墓』を、夫婦のドラマとして、アナートルが闘病している段階から順に読み解いていこう。

### 1. 父の秘密と母の希望（アナートルの闘病中）

『アナートルの墓』は、二元論的な父と母の対立関係のなかで展開されるドラマとして書かれている（『アナートルの墓』は、三部構成で書かれ、病以前から死、病中、死後の作品構成が推測される。）<sup>(2)</sup>。これはアナートルの闘病中についても当てはまることである。まずマラルメ夫妻の対立関係は、子供の闘病中（作品の構成のなかでは、主に第二部に当たる）においては、息子が死ぬということを知っている父と、それを知らない母との関係性として現れる。

マラルメは、一八七九年の八月二二日付の書簡を読むと分かる通り、アナートルが助からないということを医者からこっそり告げられていたのである。

妻は、かわいい我が子の症状に、重い病のほかは見えていないようです。この平穏のなかで、妻が子供を看病するために見出した勇気を取り除いてはなりません。私は、医師の宣告の斧の一撃をここで一人秘めておくのです。

Ma femme semble voir, dans l'état du mignon, une maladie grave et c'est tout: il ne faut pas lui enlever le courage qu'elle trouve, pour soigner son enfant, dans cette quiétude. Je garde donc seul ici le coup de hache de l'arrêt du médecin.<sup>(3)</sup>

(1) 使用しているテキスト、及び紙片番号は、マルシャル編纂のものである。

(2) 『アナートルの墓』の構成について詳しく語ると、現段階で次のような内容が推測される。第一部で、田園で遊ぶ子供が描かれた後、子供の突然の死が描かれる。これは母の叫びによって象徴される。第二部では、回顧的に息子の闘病生活が語られ、その死を見据えて「思考」によって息子を保存する父の姿が描かれる。第三部では、「瞑目」の場面から始まり、「埋葬」、「空虚な部屋」へと劇は展開する。息子は父や母の心のなかで生き続け、最終的には理念として復活することが語られる。また、墓への「献花」の場面が最後を飾る可能性が高いと考えられる。また、第一部、第二部、第三部の間には、時間的な「分断」や「断絶」が、あるとマラルメによって語られる。

(3) CC. II, p198.

マラルメは、妻から息子を看病する力を失わしてはいけないと思い、息子が死ぬだろうという事実を、「恐るべき秘密 un terrible secret」(169)として、家族のものには黙っておくのである。子供の死をめぐる父の「知」と母の「無知」のテーマは多くの紙片に繰り返し描かれており、この劇に緊張感を与えている。母親は闘病中、決してアナトールが死ぬとは考えようとしない。

例えば、紙片 56 において母は、アナトールの生きる意志に満ちた眼差しから、その生存への確信を得ようとする「このような目をして死んでゆくものはいません on ne peut pas mourir avec de pareils yeux」。したがってしばしば母は、子供が助かるという「希望」のもと必死に看病する女性として描かれるのである「現れた母希望と看病 la mère apparue espoirs soins」(58)。

一方で、父は、息子が助からないという「秘密」を一人抱えるところから、死を見据え、子供を思考によって理念化してゆく「沈黙する父 思考の始まり おお！ 恐ろしい秘密 私がその所有者である Père silencieux début de pensée — oh! l'horrible secret dont je suis possesseur」(120)。父は、母には子供を看病することを勧めつつ、息子が死んだとあと彼が理念として蘇るべき作品を書くために、夢想し思考しているのである「父は聞く—母の目を見る—看病させておく II—彼は夢想する père écoute — voit yeux de mère — laisse soigner II et songe lui —」(98)。

したがってマラルメ夫妻は、息子が死んでゆく日にそなえ思考を働かせる父と、息子が生き残ることのみを考え看病する母に対比され描かれている「母 彼をよく看病する— 思考を中断させる母の心配 そして 彼が死んでいると考える父と 彼が生きていると考える母の間の子供 mère soigne le bien — soins de mère interrompant pensée — et enfant entre père qui le pense mort, et mère vie —」(199)。このようにマラルメは、子供の助かるわずかな可能性のため子供の死の運命を、母には伏せておいたのであるが、母の抱く息子の生存への「希望」には、これを冷たく幻想と退けている「父は—彼が死んでゆくものだと考えつつ—母、至上の幻想、等々 père — voyant qu'il doit être mort — mère, illusion suprême, etc.」(69)。

ここまで見てきた内容からも、すでに、息子の闘病中の振る舞いのなかで、父が母に子供の死の運命を隠しておくという心理的なすれ違いが見られる。しかし、むしろこの作品から見られる父と母の対立関係は、アナトールの死後に先鋭化するものであり、これを子供の死後を描いた紙片から、追っていかなければならない。

## 2. 夫婦の分断と再会への願い（アナトールの死後）

アナトールの生前からも夫婦の心理的なすれ違いは見られたが、アナトールの死後（作品構成のうえで第三部に当たる）は、その死に対する反応の違いから、夫婦の関係性に決定的な「不和」がもたらされる。それではまず、夫婦が「分断」関係にいたる過程をみていこう。

マラルメは子供が死ぬことを見据えて、彼を思考によって理念化していたゆえに、アナトールが死んでも、その死を必然として受け入れるのだが、生存のみを考えて看病を続けてきたマリーは、子供の死を決して受け入れない。このことは紙片 113 に、次のように表されている。

(113)

III

墓—運命

—父—〈彼は死すべき定めにあった—〉

母は自らの果実についてそういれるのを望まない。

—そして父は、子供として完遂された運命に立ち戻る

III

tombeau — fatalité

— père — « il devait mourir — »

mère ne veut pas qu'on parle ainsi de son fruit —

— et père revient à destinée accomplie en tant qu'enfant

母にとって息子の死を受け入れることで、詩的理念へと変貌させようとする父の姿勢は理解しがたいものでしかないのである。リシャルが語るように<sup>(4)</sup>、子供の消滅を受け入れることは、子供を産んだものを生物学的に侮辱することである。父の「知」と母の「無知」のテーマは、アナトールを理念的存在にするためにその死を受け入れる父と、その死を否認する母というかたち引き継がれ先鋭化するのである。

このような息子の死への反応の違いによって、夫婦の「不和」はもたらされるのである。マラルメにとってアナトールの死は、詩作品としてアナトールを蘇らせる契機としてとらえられている。一方で、マリーにとっては息子の死はすべての終わりなのであり、この死を受け入れられるものではないのだ。マラルメとマリーは、息子の死をめぐって、心理的に慰め合えない存在として取り残される。この認識の違いから夫婦の「不和 trouble」(202) が生まれるのである。

(202)

Le père grave

c'est à moi qu'il appartient ayant donné l'être de ne pas le laisser perdre — trouble

et mère — je ne veux pas qu'il cesse (*idée là!*)

重々しい父

存在を与えたのは私であるのだから、彼をなくさないようにするのは私の義務だ、—不和

そして母は— 彼がいなくなるなんていや (観念がそこに!)

マラルメは、次に引用する紙片に見るように、アナトールの死がもたらしたこの夫婦の「不和」を、極めて悲劇的なかたちで表現する。

(2)

enfant sorti de nous deux — nous montrant notre idéal, le chemin — à nous ! père et mère qui lui survivons en triste existence, comme les deux extrêmes — mal associés en lui et qui se sont séparés — d'où sa mort — annulant ce petit «soi» d'enfant

私たち二人から出てきた子供— 私たちに、私たちの理念、道を示しつつ— 私たちに対して! 父と母は悲しき存在として彼の後に生き残る、二つの極として— 彼のなかで、うまく結び付けられずに 分離してしまった—そこから彼の死が生じる—子供のこの小さな「自己」を無化する死

夫婦は、アナトールの死によって「二つの極 les deux extrêmes」へと分離してしまうというのである。さらにここには、お互いがあまりに相容れない存在であったがゆえに、アナトールの死が起こってしまったのではないかという思考すら見出すことができるのである。子供の死が、父と母が互いに、不適合な存在であることの証明となってしまったというのである。マラルメの夫婦関係の「不和」は、もはや「分断」や「断絶」といった言葉を当ててよいほど深刻なものである。

マラルメは、妻を排除するかたちで、この作品を完成させなければいけないと考える。これをマラルメは、「父と息子の婚姻 hymen père et fils」(23) というテーマのなかで表している。マラルメは、息子から受け継ぐ精神的本質を、「理念化の種子 semence idéalisation」(17) と呼んでいる。マラルメにとって、息子を永遠化する作品とは、アナトールの精神的な「萌芽 germe」(30) を自らのなかに吸収し、これをマラルメの精神の「母胎 flanc」(6) のなかで育むことで生まれるものである。アナトールが再び生まれてくるこの場面では、母は厳しく排除されてしまうのである「姻戚関係—至高の婚姻、一命が私にある限り、これを使う ~のためにだからそのとき母はそこにはいない? une alliance — un hymen, superbe — et la vie restant en moi je m'en servirai pour — donc pas mère alors ?」(42)。

(4) *Pour un tombeau d'Anatole*, introduction de Jean Pierre Richard, Éditions du Seuil, 1961, p.54.

しかし一方で、マラルメは、アナトールの死を境に、このようにばらばらになってゆく夫婦関係を、なんとか修復しようとも試みている。マラルメの一度断絶してしまった妻との統合への試みが、『アナトールの墓』のドラマを展開する原動力になっているように思われる。これをマラルメの妻との「再会への願い」として、「涙」、「大地」、「一元論的統一」というキーワードをもとにして、順に読み解いてゆこう。

本章で述べてきたようにマラルメとマリーが、分断されてしまったのは、子供が消滅したという事実を、子供を「作品」へと変貌させるために受け入れるというマラルメの考えを、マリーが共有できないということに端を発している。このような事態のとき、マラルメがマリーに勧めることは、愛する人が亡くなったとき最も自然な行為なのだが、ただ「涙」を流すことである。

マラルメは、積極的にマリーに泣くことを勧めている「私たちはすべての涙を引き受けよう—泣け、母よ nous prenons toutes larmes — pleure, mère」(79)、「父と母 二人の愛 子供の観念 母へ お前は泣け— 私 は考える père et mère à deux leur amour idée de l'enfant à mère pleure toi — moi, je pense」(134)。『アナトールの墓』のなかで「涙」は、生者の「眼差し」を洗い清め、イメージとして死者に再会させるものとして語られているのである「涙、明晰性の横溢、それを通して—死者と再会する larmes, affleux de lucidité, le mort se revoit à travers —」(62)、「死者—涙によって純化する我々のなかのイメージの純化—そして以前もイメージであったもの—ただ触れずにとどまること—しかし語り合うこと— mort — épuration image en nous épurés par larme — et avant image aussi — reste simplement ne pas *toucher* — mais parler —」(70)。

マラルメがマリーに泣くことを勧めるのは、「涙」によって、詩人でないマリーに、詩人の「純粋な眼差し」を与えようとするからである。一八七〇年代にマラルメは、「喪の乾杯」に象徴されるように、詩人を「目」で事物の本質を見抜く「見者 voyant」として理解していた。「喪の乾杯」のなかでも、「涙」は「明晰さ」と結びつけられて考えられているのだが<sup>(5)</sup>、詩人の「澄み切った眼差し le regard diaphane」<sup>(6)</sup>の「明晰さ」に、すべての人間を至らしめてくれるのが、「涙」の持つ「明晰さ」なのである。マラルメは涙によって純化された「眼差し」をもってして、亡くなった息子と再会することをマリーに勧めているということである。「涙」は、マリーに愛する息子と再会させる慰めをもたらすのである。愛する者の不在のなかでの、「純粋な眼差し」による死者との再会というのは、マラルメとマリーが共有する地点であろう。父の「知」と母の「無知」という対立関係は、「涙」の明晰さにおいては解消されるのである。

このようにマラルメは、母には泣くことを進める一方で、自らは思考することで、この悲劇の意味を読み解き、子供を永遠化するための作品の制作に向かう。父と母がともに泣いているのでは、夫婦は再会することはできないのだ「互いに隠れ合った二人の涙 larmes des deux cachées l'un à l'autre」(112)。マラルメによって完成された作品が、夫婦が再び統合されたことの証明とならなければいけない。

マラルメが、不和に陥った夫婦を和解させるために持ち出す、もう一つの重要な要素として「大地」がある(アナトールの埋められた場所は、フォンテーヌ・ブローの森の傍のサモローであり、「大地」は重要な舞台背景である)。夫婦の対立関係を解消させるための「大地」の働きについては、リシャルが最初に指摘しているが、その働きについて、論をより大きく発展させた研究としては、熊谷謙介氏の論文<sup>(7)</sup>がある。これらの先行研究を参照しつつ、「大地」によって、夫婦の分断を修復しようとするマラルメの試みを考察しなければならない。

まず「大地」は、すべての生命の誕生の源であると同時に、その死後は、遺体を優しく抱擁し、迎え入れるという母性的な役割を担うものとして理解される。『アナトールの墓』においてマラルメは、「母 mère」と韻をふむ「大地 terre」を、多くの紙片で「母」と同一視し、登場させている「大地が語る—子供によって掘られた穴によって大地と混合される母—彼女は降りてゆくことになるだろう—後に— terre parle — mère confondu à terre par fosse creusée par enfant — où elle sera ——— plus tard —」(114)。

(5) «J'ai méprisé l'horreur lucide d'une larme,» *Toast funèbre* の第二一行目 OC. I, p.27.

(6) OC. I, p.28.

(7) 熊谷謙介 マラルメの「喪の日記」?—『アナトールの墓』分析 人文研究 No.184 2014, pp.104-117.

マラルメは、「大地」という母によって、鋭く対立してきた父と母の二元論を止揚しようと試みる。父は、子供の精神を吸収し、作品にするという作業において、母を「大地」というかたちで参加させる。

(157)

(terre mère reprends le en ton ombre — et de même son esprit en moi  
mère a saigné et pleuré  
père sacrifié — et divinise

(大地 母 彼をお前の闇の中へと迎え入れよ—そして同様に 彼の精神は私のなかに  
母は血を流し、そして涙を流した  
父は犠牲をともした—そして神性化する

この紙片では、「母」が子供を産んだときに「血」を流したこと、そして子供を失って「涙」を流したことに対比されて、「父」が子供の命を犠牲にして、その精神を永遠化する場面が描かれている。ここで注目すべきは、「母」と同一視された「大地」が、子供の遺体を回収することによって、子供の精神を吸収し、作品にするという父の作業に協力しているということである。『アナトールの墓』で繰り返されてきた、父と母の対立は、「大地」を「母」と見立てることで、宇宙的想像力のなかで和解させられているのである。

ここで働く「大地」の役割を、マラルメは次の紙片に見るように、とても詳しく語っている。

(166~168)

temps — que corps met à s'oblitérer en terre — (se confondre peu à peu avec terre neutre aux vastes horizons)  
c'est alors qu'il lâche l'esprit pur que l'on fut — et qui était lié à lui, organisé — lequel peut, pur se réfugier en nous, régner en nous, survivants — (ou en la pureté absolue, sur laquelle le temps pivote et se refait — (jadis Dieu) état le plus divin —

時間—肉体が大地のなかに徐々に摩滅してゆく— (広大な地平線を持つ中性的な大地に少しずつ溶け合わされる)

そのときだ、かつてそうであった純粹精神を解き放つのは—彼に結びつけられていたもの、組織されて—それが純粹となって我々のなかに避難し、生き延びる我々のなかに君臨するのである— (絶対的な純粹性となって その上に 時間が回転し、作り直される— (かつての神) 最も神聖な状態—

「大地」は、子供の遺体をゆっくりとした時間をかけて分解することで、不純なもの取り払い、アナトールの精神的本質を出現させるのである。この精神的本質とは、この紙片では、「純粹精神 l'esprit pur」と呼ばれており、マラルメの用語で言えば、「自己 Soi」=「神性 divinité」と言われる人間のなかに内在している神的な性質である。「大地」は、これを両親の心のなかに解き放つのである。両親は、それ以後は精神としての子供と生き続けてゆくというのである。このような過程を踏めば、先に述べた母を排除した「父と息子の婚姻」に、母もまた「大地」として子供の精神的な種子を、それを作品へと永遠化しようとする父のなかへと放ち、参加できるというのである。

しかし、ここで一つ疑問は残る。これは、マリーを「大地」という宇宙的な存在と同一視しているマラルメの頭の中での出来事であって、子供の死を受け入れられない現実のマリーの心情を無視しているのではないかという疑問である。「大地」を母と見立て、作品のために父と母が協働するというだけでは、夫婦が和解するというには根柢に乏しい。

この問いについて考えるのには、熊谷謙介氏の研究が参考になる。熊谷氏は、「大地」が、肉体を解体するためにかかるゆっくりとした「時間 temps」こそが、夫婦を和解させるのに必要なものであることを指摘している。「大地」とは、先にあげた紙片以外でも、アナトールを作品のなかの神にする犠牲の儀式を、ゆっくりとした過程に変えるものとして語られる「ゆっくりとした犠牲 大地がこの時間に彼を変える もう一人母

(母は沈黙している) 永遠の無言の苦しみ *lent à sacrifice terre le change pendant ce temps autre mère (mère se tait ?) douleur éternelle et muette*] (101)。

「大地」が要するこのような緩慢な時間のなかで、マリーは悲しみのなかで多くの「涙」を流すことで、最終的に子供の死を受け入れるという作品の筋書きはマラルメに到来した可能性がある。子供の消滅を隠し持つ「大地」は、当初、子供の死を受け入れられないマリーには、心理的に近づかせることができない場所として語られていた「母 彼はもう生きることはないだろう—ふたり 父は、墓の前で (母を遠ざける?そして戻ってくる?— *mère il ne vivra pas !— deux — père, devant tombeau (écarte mère ? puis revient ?—*] (141)。

しかし、「大地」が、両親にもたらすゆっくりとした時間によって、まさにその「大地」という場所で、母が子供の消滅をはっきりと見つめ、これを受け入れることが示唆される紙片がある。熊谷氏は、マリーが子供の死を受け入れる場面として次に引用する紙片を挙げる。

(183, 184)

*rupture | en deux*

*j'écris — lui (sous terre) décompositon*

*mère voit — et ce qu'elle devrait ignorer —*

*puis maladie il revient jusqu'à ce que, tout épuré! (par mal) et couché — si beau mort — que fiction tombeau (on le fait disparaître — pour qu'il reste en nous son regard (conscience) — longtemps regardé pendant maladie —*

*ou alors triomphe après —*

*3<sup>e</sup> partie*

*rupture entre I et II et entre II et III*

*tout se rattache —*

断絶 | ふたつに

私は書く—彼は (大地の下で) 解体する

母は見る—そして彼女が知らないでいいものを—

そして病んだ彼は戻る (病によって) 完全に純化されるまでそして横たわる—あまりに美しい死者—虚構の墓 (彼を消すのだ—我々のなかに留まるために 彼の眼差し (意識) —長い間見られた 病気の最中—

あるいはその時、勝利、その後で

第三部

IとIIの間 IIとIIIの間の断絶

すべてが結びつく—

「断絶 | ふたつに *rupture | en deux*」とは、夫婦の不和の関係性を表しているが、注目すべきは「母は見る—そして彼女が知るべきでないものを— *mère voit — et ce qu'elle devrait ignorer —*」という一行で、マラルメが、妻に「大地の下」で、子供の消滅を直視させているのである。そして、妻が子供の死を受け入れると同時に、子供の精神(「自己 *Soi*」)が、両親のなかにとどまることによって、「虚構の墓 *fiction tombeau*」が完成することが記されているのである。ここには、子供の肉体が解体するのにかかる長い時間をかければ、マリーも最終的に子供の死を受け入れるというマラルメの考えが読み取れる。「第三部 IとIIの間 IIとIIIの間の断絶すべてが結びつく— *3<sup>e</sup> partie rupture entre I et II et entre II et III tout se rattache —*」とあるように、夫婦関係の分断の修復と、作品の完成を示す、子供の死によって分断された時間の修復は同時なのである。

「大地」のもたらすゆっくりとした時間のなかで、マラルメは子供のために「虚構の墓」の建立に取り組み、一方で、マリーには慰みとなる「涙」を十分に流させ、その死を受け入れてもらうことを願うのである。そして、夫婦が、子供の精神が自分たちのなかに生き続けていることを確信した後、夫婦は「大地」の上にあるア

ナトールの墓の前で再会するものとして語られるのである。この再会が、夫婦の分断から、夫婦の再びの統合のしるしとしてマラルメに認識されているのである「父と母が、必要だろうか？二人は再会する墓の前で―彼なしで ああ！どうだろう？ il faut le père et mère ? qui se retrouvent tous deux devant sépulcre ― sans lui eh! bien ― ?」(75)、「孤独な父と孤独な母は、一互いに隠れ合って、再び見いだされる…一緒に le père seul la mère seule ― se cachant l'un à l'autre et cela se retrouve...ensemble」(88)。

マラルメは、紙片 136 に見られるように『アナトールの墓』の最後の場面を、墓への献花で終わらせようとした可能性があるが、それはこの墓の前での夫婦の再会の場面に対応しているといえる。したがって、夫婦関係の分断の修復が、『アナトールの墓』の完成には必須であり、子供の死を受け入れて両親の心のなかに、新しく位置づけられた息子の精神（「自己 Soi」）が、夫婦が再び結びついたことの証明となるのである。このようにしてマラルメは、自分自身だけでなく、夫婦としての喪が果たされる作品として『アナトールの墓』を完成させようとしていたのである。

また、このような夫婦の分断から、夫婦を再び統合するために、マラルメが「一元論的な原理」を持ち出そうとしていたことも、最後に付け加えておこう。マラルメは、二元論的な父と母の対立は見かけ上のものであって、もともと男女は、それぞれが、他方の一面を持ち合うことを語り、ぴったりと和合するのだと語る「二重の面 男と女 あるときは一方にあり、あるときはもう一方にある、それゆえに深い結合 le double côté homme femme ― tantôt chez l'un, chez l'autre, d'où union profonde」(58)。また、父は、母が子供をあやす揺りかごのリズムを借りることで、両極にあるように見えていたものを一点に集約してゆく。マラルメは、父と母の二元論的な対立を、「生」と「死」、そして「詩」と「思考」を同一のもとみなす一元論的な世界のなかで解消しようと試みるのである「母 生死の同一性 父は、母の揺りかごのリズムをここで取り戻す サスペンス ― 生死 ― 詩 ― 思考 mère identité de vie mort père reprend rythme pris ici de bercement de mère suspens ― vie mort ― poésie ― pensée」(130)。

マラルメが、『アナトールの墓』を、子供の死のなかで、鋭く対立する父と母の二元論的世界のドラマとして構築しながらも、最終的にはこのような「一元論的な原理」によって、夫婦の対立はもちろん、すべてに対立のない世界へと収束させて終わらせようとしていたことが分かる。マラルメの二元論を対比的に用いつつ、最終的には一元論的な世界にドラマを収束させる態度は、マラルメの後の作品『エロディアードの婚礼』などにもみられるものであり、注目すべきものである（『婚礼』では、エロディアードとヨハネによって、生と死、男と女、昼と夜、精神と肉体などの合一が目指される）。

\*

本章では、『アナトールの墓』を、夫婦の劇として読んできた。これは、子供の死によって、「分断」された夫婦関係を、再び「統合」することを目指した劇として読むことができた。それは、マリーが、子供の死を受け入れ作品に変えるというマラルメの態度を共有できないがために、夫婦が不和に陥ってしまうが、最後はマリーも子供の死を受け入れ、両親のなかに生きる子供の精神（「自己」）が、夫婦の新しい統合の象徴となるというドラマである。実際には、アナトールの死を境に生まれた夫婦の不和は深刻で、生涯二人のあいだに横たわる溝となってしまったのだが、毎年、夫婦はともに万聖節にアナトールの墓参りを続けたのであり、子供の墓の前で、妻と和解することは、この覚書が挫折した後もマラルメの願いであり続けたのである。

## 第二章 後継者の死 アナトール

次に考察したいのは、マラルメにとって息子アナトールとはいかなる存在であり、アナトールの死がマラルメに何を意味するかということである。多くの書簡から知ることができるよう、マラルメにとってアナトールが愛しい息子であるというのは、多くの世の父親が子供を可愛がるのと何ら変わるところはない。解明しなければいけないのは、父であると同時に、詩人であるマラルメにアナトールがどのような存在として現れたかということである。

まず思い起こしておきたいのは、伝記的事実からして、アナトールは詩人を思わせる子供だったということ



である。『マラルメとH・ルージュンとの未刊行書簡集』の序文のなかでC・L・ルフェーヴル＝ルージュンは、アナトールの靈感を受けたような目や、美しい額、いたづらな口には、詩や美の讃嘆者となり得ると思わせるものがあつたと述べている。さらにその言葉の鋭さは、父親を含め周りの大人たちを驚かせたという。

例えば、美しい自然を愛したアナトールは、幼いながらも女性の美に対して敏感であつたらしい。フォンテーヌ・ブローの森を走り回っていたアナトールは、通りがかった綺麗な女性に礼儀正しく道を譲り、その美に感嘆して舌を打ち鳴らしたという。さらにアナトールは、詩人特有の「倒錯の魔 *démon de la perversité*」にも早くから取り憑かれていた。ある日、乗合馬車で母の膝の上に座っていたアナトールは、傍に座って聖務日課書を読んでいる司祭に、「神父様、接吻してもいいですか」と優しく尋ねた。そのように言われ驚き感動している神父に接吻するとアナトールは、かぎりなく甘美な声でこう言った「それでは、こんどは、ママに接吻してください」。

リシャールが述べているようにこれらの逸話は、どこの家族も作り上げる伝説として片づけることもできるが、詩人であるマラルメに、アナトールのなかに詩人の精神が息づいていることのなにかのインスピレーションを与えたことは間違いないだろう。事実、『アナトールの墓』のなかでアナトールは、まだ子供ではあるが、詩人的精神を宿した者として語られているのである。

それをよく物語っている紙片として、マラルメが大人になったアナトールと「詩」について語り合うことを描いた紙片がある。子供であるがゆえにアナトールのなかにある詩人の精神性は未発達なものなのであるが、マラルメは、将来アナトールが大人になったときのことを夢みることで、父にとって息子がいかなる存在であつたのかを美しく語っている。

(50)

Oh! laissez — nous fumerions pipe — et causerions de ce qu'à nous deux nous savons mystère

おお！ 放っておいてくれ—私たちはパイプをふかしただろう— そして私たちふたりが知っていることについて語りあつただろうに 神秘

この紙片はリシャールとマルシャルの読みが大きく異なっている紙片である。リシャールは「私たち 墓地 / 父 nous cimetière/ père」と読むが、マルシャルは「私たちは パイプをくゆらしただろう nous fumerions/ pipe」と読んでいる。本稿では、マラルメのアナトールに対するイメージがよく表されていると思われる後者の読みを取りたい。この紙片に登場する「わたしたち nous」とは、明らかにマラルメとアナトールのことを指している。さらに「パイプをふかすという」という動作が、ここで登場するアナトールが大人になったアナトールであることを表している。

「神秘 *mystère*」とは、マラルメにとっては常に「美」や「詩」のことを表している。したがってこの紙片は、マラルメと大人になったアナトールが、パイプをふかしながら「詩」について語り合っているところであると想像できる。竹内信夫氏が指摘しているように<sup>(8)</sup>、パイプをふかしながら「神秘」について語りあうというのは「火曜会」を思わせる描写であるが、ここで重要なのはアナトールが「詩」を理解することができる大人へと成長してゆくことが、詩人であり父でもあるマラルメの夢だったということである。

「詩」の神秘を共有できる存在は、今までマラルメの「家族」にはいなかったのである。妻のマリーは出会った当初から、「詩」を理解する芸術家の心は持っていないとされていたし<sup>(9)</sup>、それは長い結婚生活を通してもなんら変わらなかった。したがってマラルメはここまで、「家族」の誰かと詩の「神秘」を共有することができてはいなかった。「海の微風」(一八六六年)においては、「家族」との現世的な生活を捨てて、「詩」の「神秘」を追い求めようとする詩人の姿さえ歌われていたのである。そのようななかアナトールという息子を得たことは、マラルメに、「家族」を捨ててどこか理想の場へと逃避したいと歌う在り方とは別の展望をもたらした

(8) 『マラルメ全集 I 別冊 解題・註解』筑摩書房 2010, p.557.

(9) *DSM-VI*, p61.

たと思われる。息子アナトールは、マラルメに「詩」の神秘を語り合う期待を抱かせたのである。

要するに、マラルメは詩人の精神を宿した存在として、息子アナトールを夢みているのである。したがって詩人的精神として夢みられていた「アナトールの死」は、マラルメに自らの「後継者の死」という強い印象を残したと考えられる。『アナトールの墓』のなか（紙片 10、14、15、16）で、マラルメはアナトールを自らの詩人の「義務」を受け継ぐ詩の「後継者」として語っているのである。例えば次の紙片においては明確に、父から子への「文学的継承」が語られている。

(10)

père qui né en temps mauvais — avait préparé à fils — une tâche sublime — [...] fera-t-il la tâche de l'enfant<sup>(10)</sup>

良くない時代に生まれた父は一息子のために準備したのだ—崇高なる義務を— [...] 彼は子供の義務を果たすのか

この紙片ではマラルメはアナトールを、自らの詩の「後継者」として語っているが、これはここまで見てきたようにマラルメが息子のなかに詩人の精神性が宿っていることを期待していたことに大きく由来すると考えられるのである。さらに「後継者」について語った別の紙片では、「大いなる心 grand cœur」(14)を持つアナトールは、父ですら「暗礁に乗り上げてしまった広大な計画 projets trop grands — et venus là échouer」(14)を実現できるほどの天才だったのだと英雄化して語られているのである。

本当にマラルメがアナトールに詩人になってほしいと考えていたかは定かではないが、マラルメにとってアナトールの死が、「詩」を語り継いでゆく存在の喪失を意味していたことは間違いない。アナトールの死によって、「詩」の「神秘」を愛する息子と分かち合いたいというマラルメの夢は虚しくも消えてなくなったのである。残されたマラルメにできることは、「後継者」とされる「この息子の驚くべき知性 cette merveilleuse intelligence filiale」(14)を受け継ぎ、その「明晰さ lucidité」(15)を生かしながら『アナトールの墓』を完成させることで、息子の天才性を証明する作品を書くことであったのである。すなわち、父が「子供の義務 la tâche de l'enfant」(10)を代わりに果たすのである。

また最後に、詩人の「義務」を継承してゆくというこの物語は、マラルメの文学のなかでは、『イジチュール』に連なる物語として読むことができることにも触れておこう。『アナトールの墓』のなかには『イジチュール』と同じく、「種族 race」(122、127)という言葉が用いられており、自らを先祖から詩を書く「義務」を受け継いだ一族の末裔であるという認識は、ここにも働いている（また『アナトールの墓』と『イジチュール』は、夜を吹きすさぶ「空無の風 vent de rien」(61)や、墓地などの舞台背景も共通している）。

『イジチュール』と違うのは、『アナトールの墓』は、マラルメが、先祖からの詩人の「義務」を受け継ぐことに終わるのではなく、その「義務」を、子孫に受け継がせてゆく物語にまで発展させていることである。マラルメは、息子アナトールに詩を語り継ぐことができなかつた挫折のなかで、次の世代に詩人の「義務」を譲り渡すという問題に直面したと言える。『アナトールの墓』は、詩人の義務を受け継ぐテーマから、詩人の義務を未来の世代へと託してゆくというテーマへのマラルメの転換点を示しているのである。『アナトールの墓』において見られた、アナトールの死を通してあらわれた次の世代への詩人の「義務」の継承の意識は、マラルメの後の文学『賽の一振り』や、マラルメが息子として扱ったポール・ヴァレリーとの交流<sup>(11)</sup>などにも反映されてゆくと思われるのであり、マラルメの文学や生涯にわたっての研究が必要である。

\*

本章で考察してきたように、マラルメにとってアナトールとは、詩人的精神の持ち主として夢みられた存在だったのである。そしてマラルメはその死によって、「後継者」とも呼ぶべき、家族のなかで自らと「詩」を

(10) OC. I, p516.

語り合うことが期待された存在を失ったのである。マラルメは、この悲劇を「後継者の死」というテーマのもと、『イジチュール』に連なる一つの物語にまとめようとしたのであった。それでは最後に、娘ジュヌヴィエーヴが弟の死のなかで果たした役割について考えたい。

### 第三章 残された未来 ジュヌヴィエーヴ

アナトールの死によって、姉であるジュヌヴィエーヴはどのようなことを果たさなければならなくなるのだろうか。『アナトールの墓』において、娘ジュヌヴィエーヴは、父、母、息子に比べれば、登場回数は少ない（紙片 33、59、60、78、115）。しかし次に引用する紙片には、ジュヌヴィエーヴもまた、弟の突然の不在をともに乗り越える役目を担うかのように、残された三人のなかにしっかりとその位置をしめている。

(78)

famille parfaite

équilibre père fils mère fille rompu — trois, un vide entre nous, cherchant..

完全な家族

均衡 父 息子 母 娘 崩壊した—三人は、私たちのあいだにある空虚、探している。

死んだアナトールのために、そして崩壊した家族を救うために、マラルメがジュヌヴィエーヴに託す役割はとても大きい。アナトールが亡くなった当時、彼女はまだ一四歳の少女であり、その「使命」は未来に向かって伸びている。

マラルメが語るその一つ目の役割とは、死んだ弟の「空虚 un vide」(78) を埋めるために、彼女が結婚して子供を産むということである。この子供が死んだアナトールの代わりになるというのである。

(115)

enfant

sœur reste, qui amènera un frère futur — elle exempte de cette tombe pour père mère et fils — par son mariage.

子供

姉は残り、未来の弟を連れてくるだろう—父 母 息子のためのこの墓を免れる彼女は— 彼女の結婚によって

リシャルも述べるように<sup>(12)</sup>、これは未来の家族の均衡をなりたたせるためのマラルメのユートピア的発想であろう。だがここで重要なのは、マラルメ夫婦にはアナトールの代わりとなる子供をつくるのは、不可能であるとされているのに「父と母は、別の子供をつくらないことを決心した père et mère se promettant de n'avoir pas d'autre enfant」(18)、ジュヌヴィエーヴにはこの子供を連れてくるのが可能だとされていることである。ジュヌヴィエーヴにはアナトールの死をのり越えるために特別な地位が与えられているのである。ジュヌヴィエーヴは彼女だけが果たすことが可能なこの使命によって、父、母、息子の眠ることになる「墓」を免れるのである。

(11) ポール・ヴァレリーは、奇しくもアナトールと同一年生まれであり、マラルメは、ヴァレリーにアナトールの姿を重ねることがあったのではないだろうか。ヴァレリーは、マラルメが亡くなった際、マラルメとの交流を振りかえり次のように語っている「私は、マラルメ自身にすすめられて、まぎれもない息子としての親密さに慣れきっていた」(アンドレ・ジッド宛書簡の言葉 (一八九八年九月一二日付) *André Gide Paul Valéry Correspondance 1890-1942*, Gallimard 2009, p.504.)。マラルメは、アナトールに詩を語り継ぐことはできなかったが、その分、ポール・ヴァレリーのような新しい世代の交流のなかで、息子と叶えられなかった夢を果たしていったとも言えるだろう。

なお、マラルメとヴァレリーの父と息子のような師弟関係をこえた交流を考察した研究としては、清水徹氏の「ある対話について—マラルメとヴァレリー—」(『ユリイカ』一九八六年 青土社)がある。

(12) *Pour un tombeau d'Anatole*, introduction de Jean Pierre Richard, Éditions du Seuil, 1961, p.57.

二つ目にマラルメがジュヌヴィエーヴに託す役割は、彼女が両親の死後に、マラルメ、マリー、アナトールの眠る墓の前に立ち「思考」や「記憶」によって三人を結びつけることである。

(59, 60)

et toi sa sœur, toi qui un jour — (ce gouffre ouvert depuis sa mort et qui nous suivra jusqu'à la nôtre — quand nous y serons descendus ta mère et moi) dois un jour [2] nous réunir tous trois en ta pensée, ta mémoire — — —

— de même qu'en une seule tombe

toi qui, selon l'ordre, viendras sur cette tombe, non faite pour toi —

そしてお前 彼の姉であるお前は、いつの日か— (彼の死以来開かれた — 私たちの死まで—そこにわたしたちお前の母と私が降りるときまで追いかけてくる深淵)

お前はいつの日か、お前の思考、記憶において私たち三人を結び付けなければならない

— たった一つの墓に納めるように

道理に従って お前はこの墓を訪れるものだ お前のために作られたのではないこの墓を

天国の存在を信じないマラルメにとって、死者たちが再会する場所は残された者の心のなかにしかない。したがって「家族」のなかで最後に残されたジュヌヴィエーヴが、亡くなった父と母と息子を再会させなければならぬのである。ジュヌヴィエーヴの心のなかで三人が再び結びつき休らうことができたとき、アナトールの死という悲劇は乗り越えられたものになるとマラルメは想像しているのである。

一つ目の役目は、ジュヌヴィエーヴが子供を持たなかったために果たされなかったが、二つ目の役目は果たされたと言える。ジュヌヴィエーヴは、幸いにも両親の死のあとまで生きのびたのである。弟が亡くなったあと両親の間に立って、ばらばらになってゆく「家族」を必死に繋ぎとめようとしていたこの聡明な娘は、両親の死後、その優しい心のなかで三人を再び結びつけたはずである。マラルメの託した「使命」が、ジュヌヴィエーヴによって果たされた日があったことを想いつつ本章を終えたい。

## まとめ 今後の研究課題

本論は、『アナトールの墓』をマラルメ一人の劇ではなく、父、母、息子、娘、家族全員の劇として読むという試みであった。本研究から、アナトールの死のなかで家族それぞれに与えられた役割や、死によって変わる家族の関係性が、三つの章にわたって浮き彫りにされた。「第一章. 夫婦の悲劇」では、子供の消滅を受け入れ作品にするという態度を共有できないということから生じた夫婦の分断を、マラルメが必死に修復しようとするドラマを読みとった。「第二章. 後継者の死」では、アナトールは詩人的精神の持ち主として夢みられた存在であり、アナトールの死は、家族のなかで詩の理解者として期待された存在の喪失を意味したことが分かった。「第三章. 残された未来」では、娘ジュヌヴィエーヴが、両親の死後、父、母、息子を結びつける「使命」を託された存在として描かれているのを見た。

今後の研究の課題としては、『アナトールの墓』のなかで見られた「家族」の役割や、「家族」の関係性の変容が、『アナトールの墓』以後に書かれた、マラルメの「家族」が登場する作品にいかんにか反映されてゆくかを検証することである。アナトールの死の思い出が刻み込まれているとされる「トリプティック」、あるいは、二つの扇詩編「マラルメ嬢の扇」、「マラルメ夫人の扇」などを読み直し、これらの作品を新しく位置づける必要があるだろう。さらに、「第二章. 後継者の死」ですでに触れたが、『イジチュール』から見られる、先祖からの詩人の義務を受け継ぐという物語が、『アナトールの墓』において、詩人の義務を後の世代へと託してゆくというテーマへと発展していることは注目すべきことである。マラルメの晩年の作品『賽の一振り』には、「師」の詩の冒険を引き継ぐ「若い亡霊」がでてくるが<sup>13)</sup>、『賽の一振り』の読解にも、詩人の義務の継承のテーマの転換点と考えられる『アナトールの墓』の研究が活かされると考えられる。これらを研究課題とし、本研究を

<sup>13)</sup> OC. I, p.374.

終えたい。

### 主要参考文献

#### テキスト・書簡（註も含む）

- Stéphane Mallarmé: *Œuvres complètes*, I, édition présentée, établie et annotée par Bertrand Marchal, Coll. «Bibliothèque de la pléiade», Gallimard 1998. (OC. I と略記)
- Stéphane Mallarmé: *Œuvres complètes*, II, édition présentée, établie et annotée par Bertrand Marchal, Coll. «Bibliothèque de la pléiade», Gallimard 2003. (OC. II と略記)
- Stéphane Mallarmé: *Correspondance* II recueillie, classée et annotée par Henri Mondor et Lloyd James Austin Gallimard 1965. (CC. II と略記)
- Stéphane Mallarmé: *Documents* VI présentés par Carl Paul Barbier Nizet 1977. (DSM-VI と略記)
- Correspondance inédite de Stéphane Mallarmé et Henry Roujon* recueillie et commentée par Mme C. Lefèvre-Roujon Genève : P. Cailler, 1949.
- André Gide Paul Valéry Correspondance 1890-1942*, Gallimard 2009.
- 『マラルメ全集 I 詩・イジチュール』 筑摩書房 2010
- 『マラルメ全集 II ディヴァガシオン他』 筑摩書房 1989
- 『マラルメ全集 III 言語・書物・最新流行』 筑摩書房 1998
- 『マラルメ全集 IV 書簡 I』 筑摩書房 1991
- 『マラルメ全集 V 書簡 II』 筑摩書房 2001

#### マラルメの研究書

- Stéphane Mallarmé, *Pour un tombeau d'Anatole*, introduction de Jean Pierre Richard, Éditions du Seuil, 1961.
- Bertrand Marchal « Anatole et « la tragédie de la nature » » *Europe*, 1998, pp.204-211.
- Bertrand Marchal: *Lecture de Mallarmé*, José Corti, 1985.
- Bertrand Marchal: *La Religion de Mallarmé, Archéologie, anthropologie, utopie*, Thèse de doctorat, Université de la Sorbonne Nouvelle. José Corti, 1988.
- Jean Pierre Richard: *L'univers imaginaire de Mallarmé*, Éditions du Seuil, 1961.
- André Vial, *Mallarmé Tétralogie pour un enfant mort*, José Corti, 1976.
- Nobuo Takeuchi: «De la notion de divinité chez Mallarmé — Un essai d'approche de la pensée mallarméenne», *Études de Langue et Littérature Françaises n. 32 Tokyo*, 1978, pp46-77.
- 熊谷謙介 マラルメの「喪の日記」？—『アナトールの墓』分析 人文研究 No.184 2014.
- ステファヌ・マラルメ ジャン＝ピエール・リシャール『アナトールの墓のために』 水声社（原大地訳） 2015
- ジャン＝リュック・ステンメッツ『マラルメ伝—絶対と日々』（柏倉康夫・永倉千夏子・宮崎克祐訳） 筑摩書房 2004
- ジャン＝ピエール・リシャール『マラルメの想像的宇宙』（田中成和訳） 水声社 2004
- ギイ・ミショー『ステファヌ・マラルメ』（田中成和訳） 水声社 1993
- 柏倉康夫『生成するマラルメ』 青土社 2005
- 佐々木滋子『祝祭としての文学』 水声社 2011
- 永倉千夏子『彼女という場所』 水声社 2012
- 大出敦編集『マラルメの現在』 水声社 2013
- 原大地『マラルメ 不在の懐胎』 慶應義塾大学出版会 2014
- 『ユリイカ 9月臨時増刊 総特集＝ステファヌ・マラルメ』 青土社 1986